**津軽　照子 （つがる・てるこ）**

**１、プロフィール**

歌人。華族の家に生まれ、津軽英麿伯爵に嫁いだが、死別後歌作に励む。最初竹柏会に拠り定型の短歌を作るが、後には「短歌表現」で口語・自由律の新短歌運動に尽力した。

＜生没＞

1887（明治20）年２月５日 ～ 1972（昭和47）年11月28日

＜代表作＞

歌集『野の道』『花の忌日』『風につたへる』

＜青森との関わり＞

夫が津軽家第12代藩主承昭の養嗣子津軽英麿伯爵。県出身文化人との交流が深い。

**２、作家解説**

東京都河田町に､伯爵小笠原忠忱の長女として生まれる｡幼少女時代は華族のお姫様として深窓の中に育つ｡華族女学校卒業後に女子学習院に入学するが中途で退学｡20歳で津軽英麿と結婚するが32歳の時に死別､短歌に手を染め佐々木信綱に学び､「心の花」同人として活躍､大正13年に竹柏会より歌集『野の道』を出版した｡その後昭和５年口語歌人児山敬一主宰の「短歌表現」に主要同人として参加､同誌の志向する新芸術派短歌の実作者となり歌風は一変した。７年､歌集『秋・現実』を刊行､二行詩風の歌が収められている。10年､随筆集『あづまにしき絵』を刊行､大正12年から昭和10年まで種々の雑誌に掲載した文章をまとめたものである｡以後12年『手かがみ』､17年『うら紙草子』等の文集も発行､『うら紙草子』は秋田雨雀の世話で刊行したもので「雪ぐに」という一文は弘前の冬の生活を描いたもの。11年には歌集『雪にのこる』､18年には歌集『花の忌日』を刊行。

戦後は「文芸心」に拠り歌作､32年『風につたへる』を出版、口語・自由律の新短歌運動を推進した。

**３、資料紹介**

〇『花の忌日』

図書

1943（昭和18）年９月15日

215mm×160mm

第三歌集。昭和５年、児山敬一の「短歌表現」に拠り、口語・自由律の新短歌運動を行うが、この歌集には昭和８年から18年までの歌1032首を収める。児山敬一は、はしがきのなかで「清みの文学である」と述べている。